

新潮文庫

生命ある限り

下 巻

曾野綾子 著



新潮社

いのちある限り
下 卷

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 146 E

昭和五十一年三月三十日 発行
昭和五十二年十月十五日 三 刷

著 者 曾 野 綾 子

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六五一
編集部(〇三)二六六五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

生 命 あ る 限 り

下 卷

曾 野 綾 子 著



新 潮 社 版

2318

目次

紫の寺	九
海鳴り	一六
海の眼ざし	二三
女詩人	二九
甘い言葉	三六
壊れた椅子の話	四三
復讐の夜景	四六
銀杏の梢にかかる星	五三
コレクションは本	六〇

蒼い火花	六七
砲声とブーゲンビリア	七四
女だけの時間	八一
正直な話	八八
陰の部分	九五
天に帰る	一〇二
或る誠実	一〇九
海辺の殺人	一一七
青春多忙	一二四
砂丘の家	一三一
お揃いの赤いシャツ	一三八

《その人》は《あの方》……………	一四五
荒野……………	一五二
三人の妻への便り……………	一七四
隠された顔……………	二〇四
白鷺のいる風景……………	二三三

解説 原田 康子

生命ある限り 下巻

紫の寺

出先でふと会った佳人は忘れ難い。

その時もそうであった。仕事で立ち寄った家で、お茶を持って来てくれた女ひとがいた。うなじの線が瑞々みずみずしい。生え際も初々しかった。鼻筋に気品さえある。足許あしもとをみるとストッキングをきちんとはいていた。藤色の服に、真珠のネックレスをつけている。考えてみれば、客を迎える時には、自分の家でもそれくらいの身づくりはするかも知れない。しかし何となくそのうちの娘とは見えないのである。年は、若夫人と見るには若すぎ、未婚の娘と考えるには、少し落ちつき払っている。

果して、その家の奥さんからは、

「親戚しんせきの娘でございますが、今たまたま訪ねて来てくれましたもので」と紹介があった。

「由希子さん、あなたもおざぶとお茶を持って、お相伴させて頂きなさいよ」と言われると、

「よろしいでしょうかしら」

と応答も自然であった。娘を席につかせてから、奥さんは、

「このひとも、もうそろそろ、急いでお相手を探さないことには、間もなくオールド・ミスって言われる年になりますのに」

と年上の女というものは常に残酷な物の言い方をするのであった。由希子は悪びれもせず微笑してその言葉を受けとめている。問わず語りに、この娘は今、彫金の勉強をしていて、そろそろ趣味がお金にもなりかかっており、縁談もかなりあるのに、片っぱしから断わって、もう二十七歳になった、とその家の奥さんは言うのだった。

「こういう女は贅沢ぜいたくなんでしょう。皆、過ぎた御縁と申し上げねばならないようなお宅から貰もらってやる、とおっしゃって下さるのに、それを片っぱしから断わってしまうんですから」

「いいえ、過ぎた御縁ばかりだからお断わりしたのよ。家を建てて下さる。車も指輪も買って下さる。だけど仕事はやめるようにでは……」

「けっこうな御身分だというのよ、そういうのを」

とたしなめられても、

「でもそれじゃ、いよいよお妾めかけさんになりに行くみたいな気がして」

と静かな口調である。

「でも、それなら、ついこの間のお話ならお受けしてもよかったんですよ。あなた好みだったんでしょ。お相手は学者で、お金も虚名もない方なんだから……」

「ええ、その点では、私、好意を持ったんです。母一人子一人の家庭で苦勞して来た方でしたし。ですけど、あちらとは……」

「あちらとはどうしたの？」

「あちらの御性格が……」

と言いかけた時、

「ごめん下さい、田中さんはこちらでしょうか。田中恒三さんは」

と郵便かデパートの配達人らしい声が裏でした。奥さんが立って行った気配を聞くともなく聞いていると、運ばれて来た品物について何か行き違いがあったらしく、長い交渉が始まっている。すると自然に、

「どうして、私に好意を持って下さるとおっしゃる方のお気持を受け入れられないか、と言われると困るんでございますけれど、おもしろいことがございました」

と由希子は話し出した。

「鎌倉の瑞泉寺すいせんじというのをご存じでいらっしゃいますか？」

言われても、すぐには思い出せなかったが、

「あの山の奥の方の……紫陽花あじさいで有名な明月院ではないけど、やはり紫陽花がたくさんあります……」

と説明されると、眼の前の由希子が服の色から突如として紫陽花の精になったように躍り出て、私は寺の全景を鮮やかに思い描くことが出来たのだった。

「花の頃にいらっしゃったことございます？」

そうではなかった。私がそこを訪れたのは八月であった。山はすでに降り注ぐようなひぐらし

の声に包まれていたのを覚えている。驚いたことに、紫陽花のすがれの花が少し残っていた。その残りの色香を受けつごうとするかのよう^{さきよう}に桔梗^{ききよう}が花盛りで、爽やかに溪^{たに}を渡って来る微風に揺れていた。

「私と縁談がございました方は、さつき申しましたように、母一人子一人で慎ましく暮らしていらつした方で、しかも英文学の学者でいらつしたんです。私、先生という職業が好きでしたから、もしかするとこの方こそ、私が一生を託す方じゃないかと、何度も、自分で自分に暗示をかけるようなことさえしたんですの。」

どこと言って非難できない方でした。もの堅い、きちょうめんな性格の方ですし、礼儀正しいし、その上、多分、美男と申し上げなきやいけないような顔立ちの方なんです。

只、ちょっと口で御説明申し上げられないほど、どこか微^かかにピントが狂うことがあるんです。お話ししてて、ほんのちょっとでございませうけれど。その他の点では、物知りですし、慎重ですし、よく教えて下さいますし、本当にいい方でした。

それで、お受けするとも言えず、さりとてお断わりの口実もないままに、或る日瑞泉寺にまいりました。実はちょうど同じ季節だったように思います」

私は彼女にどんな服装で行ったのか、と尋ねた。

「その日にはこんな色の服は着てまいりませんでした。レモン・イエローの、白い糸でステッチをかけたつまらない麻の服だったと思います」

と彼女は微笑した。

私には彼女の言葉遣いのきめのこまかさがよくわかった。紫の花の中では同系色の服など埋もれてしまうのである。

「私が行った時も花の時期でございませんし、そのせいとお参りの人も少なくてよかったですけれど、やはり驚いたのは、桔梗でございました。あそこのお坊さまは、どういふ方か存じませんけれど、紫という色がお好きな方でいらっしゃるんでございますね。水仙も萩はぎも多うございしましたが、萩にも紫がありましたかしら。

狭いお寺でございましょう。長い年月に、よれよれにすり減ったあの石段を上ってまいりますと、いつの間にか、紫陽花の繁みに迎えられていて……勿論、葉ばかりでしたけれど、中に一輪、二輪と本当に花が残っているんでございますね。これが全部花になるのだな、と思い描きながら松風の中に立っておりますと、あたりの繁みがすべて、海のような青さに變つて、激しく揺れ出したような気さえました。

それで小さな山門をくぐりますと、中に一種の石庭のようなところがありましたでしょう……いいえ、桔梗が生えているのですから少なくとも石庭ではない訳ですが、桔梗の花の紫が、瑞々しく星のように浮いているような庭ですね。桔梗というのは、本当に風と合う花でございませぬ。

お庭の一隅には、お茶を飲ませるようになっているところもございました。そこに何という種類なのか、今はめったに見られなくなった、野性の地鶏のようなのがこつこつと遊んでおりまして、どこを見ても選りぬかれた自然さでした。

私のお相手の方は仏教の伝来の系統などについて話して下さいますので、御専門以外のことも何とよくご存じなんだろう、と感心したのです。……ところがご存じでございますか？ そのお庭の一隅から墓地へ行けるような小径こみちがあります。おもしろいことに、まるで隠し墓地のような地形ですし、小径の入り口には檀家以外の方の立ち入りを禁止しますという意味の立て札もあるのですが、私たちは数メートル歩いて、お墓の入り口の鉄門のところまで行ってみました。『幽冥境を異にした』という言葉がこれほど明確に思われた瞬間はありません。その入り口から奥は死者たちのいる所なのです。墓地は山を切りくずして作ったようにも見えますし、切りとったようにそこだけ異様に白々しいのです。墓石の形も背丈の低い新しいもののなのでびっくりしました。そして墓地はとてもよく管理されていて、ゴミ一つ落ちていませんでした。

その時です。私たち二人は——彼も私も——偶然同じものに目をとめたのです。それはすぐ近くの真新しい墓石の背後ににゅっと立っている紫色の人間の手でした。いいえ、からくりは簡単なので、つまり墓石の背後に一本の庭簀にわぼうきが立てかけてあり、そこに園芸用のゴム手袋が片方だけはめてあるだけのことなのですが、その色が濃い紫なのです。園丁らしい人の姿はないのですが理由もなく、私の背筋に悪寒おかんが走りました。

『あの手袋を見てごらんなさい』

と傍らで彼も呟つぶやいた時、私は彼と共に初めて同じ感覚で語り合えるかも知れないという期待に胸を躍らせたのです。それはごくつまらないことでした。その手袋がぞっとするほど理由もなく、気味が悪い、というそれだけのことなんです。

ところが、彼が言うんです。

『このお寺はよく気をつけてますね。園芸用の手袋までちゃんと色が揃そろえてある』

この方のほうが、多分ずっと明るく前向きで物を見られる方なのだろうと思います。けれど、これだけ感じ方の違う二人が結婚しましたらどうなりますでしょう。本当に、その妖あやしいほど美しくて薄気味悪い墓地の入り口で、私は、その方とのお話をお断わりする決心をしたのでございますけれど、こんなこと、このうちで話しても、決してわかってもらえませんか」

由希子が悪戯いたずらっぽく呟いた時、この家の奥さんは、「本当にこの頃の人は無責任で」などとまだ陽気に腹を立てながら、席へ戻って来たのだった。